沈 国威先生への御礼の言葉

玄　　幸　子

先生に贈る言葉をというお話を頂戴したとき、まず頭に浮かんだのは「私が書いてよいのか」という思いでした。というのも私よりずいぶん早くから一緒にお仕事をしてこられた先生がおられ、また教科書編纂などを共にされた先生もいらっしゃいましたので、あまり接点のない私などが書いてよいものかどうか、ちょっと迷いが生じたからです。が、確かに学部のみならず大学院生の指導においては論文口頭試問時にはご一緒することも多くありましたので、私なりに先生の本学在職時のこれまでのあれこれを記しながら、感謝の言葉を添えさせていただきます。

沈先生に初めて出会ったのは、単身赴任（当時新潟大学勤務）の生活に終止符を打とうと本学外国語機構の採用人事に応募したその面接の場でした。面接時に強烈に印象に残っているのは、「こちらへ来ても敦煌学を継続しますか」という主旨の質問を受け、「もちろんです」とお答えした時の「やはりな」という大変残念そうな表情でした。どうやら私の専門は歓迎されていないようだとの思いで、半ばあきらめておりましたところ、どういうご縁か、ご一緒にお仕事をさせて戴くことになりまして、それ以来かれこれ18年のお付き合いになります。

学術面での御業績については、その膨大な量をここで述べつくすことなど到底無理ですので別のところでご確認いただくとして、公式なサイトでは知り得ない私の存じ上げる先生の一面を懐かしい思いと共にすこし紹介させていただくことにいたしましょう。近年はコロナの影響でリモート会議が増えましたが、以前は月に2回は教授会、研究科委員会が対面で行われていました。その折には、中国語のスタッフは大抵正面ひな壇に向かって左側後方の列にまとまって座っていることが多かったのですが、時に先生はニヤニヤしながら何かをしておられました。何だろうと思って観察させていただきましたところ、居眠りをしている先生方を撮影されておられるのでした。「それ、どうされるんですか」と伺いますと、あとでご自身のHPにあげて紹介されるのだとか、本気とも冗談ともつかないご返事でした。今どきの個人情報だのうるさい世情では考えられないことですが、当時はある意味長閑で楽しい時代でした。後々、会議中に先生ご自身も居眠りされる図を幾度か目にいたしましたが、幸か不幸か、どこかに掲載されることはなかったと思われます。

また、先生は教材作成にも大いに力を尽くされました。関中研、CH-TEXT’sこと関西大学

中国語教材研究会なるものを立ち上げて教科書をはじめWEB中国語教材の提供をしてこられました。現在もインフォメーションシステムの外国語eラーニングにはリンクがはられ一部活用されています。そこで公開されているポッドキャストでは“～Chinese station”という先生の軽快な語り口調の中国語を毎度耳にすることができ、作成されたビデオ教材には先生のお嬢様も出演されるという一家総出での力作が当時はよく話題になったものです。制作当時の院生たちが今では中国語学会や中国語教育学会の重鎮になり大いに活躍しているのは、先生にとりましても大きな宝であると感じておられることと拝察いたします。教材作成と共に人材も育て上げてこられたと言えましょう。

学生の指導においても、例年4月末から5月頭に六甲のセミナーハウスで院生合宿を実施され、ゼミ内での縦横（たてよこ）の緊密な関係は、受講生相互の研究に大いに有効であったことは想像に難くありません。沈ゼミ集団は大きなファミリーというイメージがありました。ある時一人の受講生が長らく音信不通になったとかで心配された先生は他のゼミ生を引き連れて彼の下宿を訪ねて大いに驚かせたというような話も伝わっています。その話を聞いた時、私がその当事者だったら本当に嫌だったろうなと思いましたが、来られては困るという思いから無断欠席をしなくなるという効果の如何については後日談を伺っておりませんのでよく存じません。が、きっと絶大な効果があったことでしょう。いずれにせよ、先生の学生に対する温かい思いが伝わってくる逸話です。

その他、新年交礼会の案内があったときに「参会は遠慮すべきだ」と言われたことなど諸々、未だにその真意と謎が解けないいくつかの事柄はさておき、最後に、本学の中国語教育学の基礎を確固たるものにし、その礎を築いてくださったことに改めて御礼を申し上げ、先生の今後のご健康と益々のご活躍をお祈り申し上げて筆を擱きます。ありがとうございました。そしていつまでもお元気で！